

# はじめに

利根川は坂東の太郎と呼ばれる。太郎とは入道雲（積乱雲）を指しており、空高く湧き上がる様が大男の立ちほだかる姿に似たことに由来している。そして、利根川の上流で入道雲が立つとき、利根川の水は恩恵と、時に災いをもたらすことを、江戸の人々が坂東の太郎と呼んだのかもしれない。日本最大の流域面積を持つ利根川では、流域での雨の降り方は一様でなく、むしろ局所的な豪雨が生じることが多い。明治以降の利根川大洪水を見ても、1910（明治43）年は烏川・神流川に、1935（昭和10）年、1938（昭和13）年、1941（昭和16）年は榛名山の北麓を中心とした吾妻川下流部と小貝川・霞ヶ浦周辺に、1947（昭和22）年のカスリーン台風では赤城山の山麓に集中した豪雨が発生している。そして、上流域のどこで降っても大きな支川が雨水を集め、中流域で利根川に合流することによって、その下流では大きな流量負担が課せられる。

流域の広さから利根川では様々な災害形態が生まれる。カスリーン台風災害で見れば上流山間部、特に赤城山麓での斜面崩壊と土石流災害、急流な扇状地における渡良瀬川での河川災害（越水氾濫）、そして中流域で大流量となる埼玉県東村（現・大利根町）での破堤災害、さらに埼玉、東京を襲う沖積平野での氾濫過程といった様々な災害形態がこの広い流域の中で生じた。

この中で、利根川中流部右岸側の氾濫だけは日本の川の中でも変則的である。普通、沖積平野で氾濫した水流は、堤内地を流れながら時を経て再びその川に戻る。しかし、利根川右岸側の氾濫は異なり、1947（昭和22）年のカスリーン台風の破堤では、氾濫水は利根川から離れ東京湾に向かって流れた。洪水氾濫ばかりではなく、利根川中流から取水する農業用水も利根川に戻らない。農業用水は灌漑した後、その川に還元するのが一般的である。ところが、利根川中流部右岸の農業用水は、中川に排水して東京湾に流出してしまう。こうした事情は、利根川が本来、埼玉平野を南下し東京湾に注いでいた川筋を、人為的に河道を付け替えて東に追いやり、遂には銚子から太平洋に注ぐ現在の姿にさせたことによる。これは利根川の東遷と言われ、江戸時代初期から昭和初期にかけての約400年以上の歳月を費やし行われた河川事業である。カスリーン台風による利根川の氾濫水は、まさに元来の川筋に戻って災害を引き起こしたのである。

カスリーン台風災害についてまとめるにあたり、本書では利根川とのつながりを重視して、関東での被災に話題を限定した。もちろん、カスリーン台風では関東以外、特に北上川でも大きな被害をもたらしている。しかし、ことのほか人間の手の入った利根川との関連でカスリーン台風災害を論じなければ、カスリーン台風の本質を捉えることはできないであろう。そして、もう一つの特徴としては、敗戦直後の社会情勢の中で起きた首都圏の災害としての側面も持つことである。

以上から、本報告書の構成は以下のようにした。

まずはじめに、カスリーン台風災害と利根川流域、渡良瀬川流域との関わりの全体像をつかむため、これらを第1、2章で詳述した。ここでは、災害の要因や被災状況のみならず、カスリーン台風を受けた後の動き、災害への予防も含めて記述している。第3章では最も多くの死者・行方不明者を出した渡良瀬川扇状地の河川災害のうち、群馬県桐生市での洪水氾濫による被災過程について、また、第4章では山地災害として渡良瀬川上流域での土砂災害の歴史と災害を生む背景について焦点をあてて記述した。第5章では、埼玉県東村での決壊による氾濫流の流下の様相を中川流域との関連から考察し、水災の時間的发展とともに行政による罹災者救援について記述した。第6章では、戦後の社会情勢の中、GHQがカスリーン台風災害にどのように対応したのか、災害救済の実態と日本政府の対応についての考察も加えてまとめている。そして、第7章では、各章で得られた知見のもとに、カスリーン台風災害を通じて今日に活かすべき災害教訓を導き出すこととした。本書中にはところどころにコラムを設けている。本文の内容を補う意味もあるが、利根川とカスリーン台風災害についての多岐な内容を紹介するため、是非加えておきたいものを選んでいく。

ところで、カスリーン台風災害についての報告書は数多くあるが、本書は各執筆者がそれぞれの視点で考察しまとめたものであり、新たな研究の展開を図ったつもりである。本書が、今後、確実に起こる利根川流域での大規模な豪雨に対して、水害の予防と軽減の一助となることを願っている。